

毛利貞齋『論語集註俚諺鈔』について —明代學術との関係を中心として—
青木洋司

江戸期において『論語』講學の需要は爆發的に高まり、様々な注釋書や解釋書が作成された。これらの頂點には伊藤仁齋『論語古義』、荻生徂徠『論語徵』が見出されるとしても、これまで必ずしも重視されていない著作群が存在する。それは國字解、訓蒙、諺解、俚諺などを書名に冠し、漢字假名交じり、和文、圖入りの形式を取り、主として、初學者などを對象とするものである。これらをひとまず、『論語』訓蒙書」と假稱し、研究（國學院大學大學院特定課題研究）を進め、全容の把握に努めている。

その研究對象において良く知られるのは、毛利貞齋『論語集註俚諺鈔』、中村惕齋『論語示蒙句解』であろう。兩書は江戸期に廣く讀まれていたが、『論語集註俚諺鈔』は『漢文叢書』第一冊（博文館、一九一三）に、『論語示蒙句解』は『漢籍國字解全書』第一冊（早稻田大學出版部、一九二六）にも収められ、江戸期以降もなお讀者を有していた。

そこで、本發表では、江戸期の『論語』訓蒙書を検討する端緒として、訓蒙的な著作が多いことで知られる毛利貞齋の『論語集註俚諺鈔』を取り上げたい。本書について、辻本雅史氏は「明代四書學の註疏類を（漢文のまま）適宜引用して、解釋の根據を明示している。總じて明代四書學をふまえた集註テキストへの詳細な注釋・解説書の體裁となっている」（『思想と教育のメディア史—近世日本の知の傳達』ペリかん社、二〇一一）とする。

辻本氏の指摘のように『論語集註俚諺鈔』には『四書大全』の他にも、『四書燃犀解』『四書存疑』『四書知新日録』『四書蒙引』『四書文林貫旨』等の明代に作成された諸註や『孔子通紀』『孔聖全書』『大明一統志』『闕里誌』等も幅廣く引用されている。しかし、毛利貞齋が、これらの明代の原書を直接見たのかには疑問無しとはしない。本發表では『論語集註俚諺鈔』と明代學術との関係、さらには「俚諺」を始めとする本書の特徴を検討したい。